



いし だ 石を抱くエイリアン

はま の きょう こ かいせいしゃ
濱野 京子 作 偕成社

あたし、八乙女市子。希望をなくした、もとい、辞書から「希望」を切りとった平凡中三女子。ある日、同じクラスをつくづく間のわるい男子、偉生からコクられた。偉生は、日本一の鉱物学者になることが夢だと臆面もなくいう変なやつだ。しかも、こいつの提案から、あたしたちは文化祭の展示で原発について調べるこ
とになってしまった。
同じ仲間としてすごすうち、偉生のいいところがわかってきたあたし。だけど、時はずんずんと流れ、二〇一一年三月のあの日がやってきた。

